

# 松山鏡

楠山正雄

青空文庫



むかし越後国松の山家の片田舎に、おとうさんとおかあさんと娘と、おやこ三人住んでいるうちがありました。

ある時おとうさんは、よんどころない用事が出来て、京都へ上ることになりました。昔のことで、越後から都へ上るといえば、幾日も、幾日も旅を重ねて、いくつとなく山坂を越えて行かなければなりません。ですから立つて行くおとうさんも、あとに残るおかあさんも心配でなりません。それで支度が出来て、これから立とうというとき、おとうさんはおかあさんに、

「しつかり留守を頼むよ。それから子供に気をつけてね。」

といいました。おかあさんも、

「大丈夫、しつかりお留守居をいたしますから、気をつけて、

ぶじに早くお帰りなさいまし。」

といいました。

その中で娘はまだ子供でしたから、ついそこらへ出かけて、じきにおとうさんが帰って来るもののように思つて、悲しそうな顔もせずに、

「おとうさん、おとなしくお留守番をしますから、おみやげを買つてきて下さいな。」

といいました。おとうさんは笑いながら、

「よしよし。その代わり、おとなしく、おかあさんのいうことを聴くのだよ。」

といいました。

おとうさんが立つて行ってしまふと、うちの中は急に寂しくなりました。はじめの一日や二日は、娘もおかあさんのお仕事をしているそばでおとなしく遊んでおりましたが、三日四日となると、そろそろおとうさんがこいしくなりました。

「おとうさん、いつお帰りになるのですでしょうね。」

「まだ、たと寝なければお帰りにはなりませんよ。」

「おかあさん、京都つてそんなに遠い所なの。」

「ええ、ええ、もうこれから百里の余もあつて、行くだけに十日

あまりかかつて、帰りにもやはりそれだけかかるのですからね。」

「まあ、ずいぶん待ちどおしいのね。おとうさん、どんなおみやげを買っていらつしやるでしょう。」

「それはきつといいものですよ。楽しみにして待つておいでなさい。」

そんなことをいいいい、毎日暮らしているうちに、十日たち、二十日たち、もうかれこれ一月あまりの月日がたちました。

「もうたんと、ずいぶん飽きるほど寝たのに、まだおとうさんはお帰りにならないの。」

と、娘は待ち切れなくなつて、悲しそうにいいました。

おかあさんは指を折つて日を数えながら、

「ああ、もうそろそろお帰りになる時分ですよ。いつお帰りになるか知れないから、今のうちにおへやおそうじをして、そこらをきれいにしておきましょう。」

こういつて散らかったおへやおの中を片づけはじめますと、娘も小さなほうきを持つて、お庭をはいたりしました。

するとその日の夕方、おとうさんは荷物をしよつて、

「ああ、疲れた、疲れた。」

といいながら、帰つて来ました。その声を聞くと、娘はあわてとび出して来て、

「おとうさん、お帰りなさい。」

といいました。おかあさんもうれしそうに、

「まあ、お早いお帰りでしたね。」

といいながら、背中の荷物を手伝って下ろしました。娘はきつとこの中にいいおみやげが入っているのだろうと思つて、にこにこしながら、おかあさんのお手伝いをして、荷物を奥まで運んで行きました。そのあとから、おとうさんは脚絆のほこりをはたきながら、

「ずいぶん寂しかったろう。べつに変わったことはなかったか。」  
と、いいいい奥へ通りました。

おとうさんはやつと座つて、お茶を一杯のむ暇もないうちに、包みの中から細長い箱を出して、にこにこしながら、

「さあ、お約束のおみやげだよ。」





といいながら、開<sup>あ</sup>けてみますと、中には金<sup>かね</sup>でこしらえた、まるい平<sup>ひら</sup>たいものが入<sup>はい</sup>っていました。

おかあさんはそれが何<sup>なん</sup>にするものだか分<sup>わ</sup>からないので、うらを返<sup>かえ</sup>したり、おもてを見<sup>み</sup>たり、ふしぎそうな顔<sup>かお</sup>ばかりしていますので、おとうさんは笑<sup>わら</sup>い出<sup>だ</sup>して、

「お前<sup>まえ</sup>、それは鏡<sup>かがみ</sup>といつて、都<sup>みやこ</sup>へ行<sup>い</sup>かなければ無<sup>な</sup>いものだよ。ほら、こうして見<sup>み</sup>てごらん、顔<sup>かお</sup>がうつるから。」

といつて、鏡<sup>かがみ</sup>のおもてをおかあさんの顔<sup>かお</sup>にさし向<sup>む</sup>けました。おかあさんはその時鏡<sup>ときがみ</sup>の上にうつった自<sup>じぶん</sup>分の顔<sup>かお</sup>をしげしげとながめて、

「まあ、まあ。」

といつていました。

二

それから幾年かたちまりました。娘もだんだん大きくなりました。ちようど十五になった時、おかあさんはふと病氣になつて、どつと寝込んでしまいました。

おとうさんは心配して、お医者にもてもらいましたが、なかよくなりません。娘は夜も昼もおかあさんのまくら元につきつきりで、ろくろく眠る暇もなく、一生懸命にかんびようしました。病氣はだんだん重るばかりで、もう今日明日がむす

かしいというまでになりました。

その夕方、おかあさんは娘をそばに呼び寄せて、やせこけた手で、娘の手をじつと握りながら、

「長い間、お前も親切に世話をしておくれだったが、わたしはもう長いことはありません。わたしが亡くなったら、お前、わたしの代わりになって、おとうさんをだいじにして上げて下さい。」  
 といいます。娘は何ということもできなくて、目にいっぱい

涙をためたまま、うつむいていました。

その時おかあさんはまくらの下から鏡を出して、

「これはいつぞやおとうさんから頂いて、だいじにしている鏡です。この中にはわたしの魂が込められているのだから、この後いつで

もおかあさんの顔が見たくなったら、出してごらんさい。」

といつて鏡を渡しました。

それから間もなく、おかあさんはとうとう息を引き取りました。あとに取り残された娘は、悲しい心をおさえて、おとうさんの手助けをして、おとむらいの世話をまめまめしくしました。

おとむらいがすんでしまうと、急にうちの中がひっそりして、じつとしていると、寂しさがこみ上げてくるようでした。娘はたまらなくなつて、

「ああ、おかあさんに会いたい。」

とひとり言をいいましたが、ふとあの時おかあさんにいわれたことを思い出して、鏡を出してみました。

「ほんとうにおかあさんが会いに来て下さるかしら。」

娘はむすめこういいながら、鏡かがみの中をのぞきました。するとどうでしょう、鏡かがみの向むこうにはおかあさんが、それはずっと若い美しい顔かおで、にっこり笑わらっていらつしやいました。娘はむすめぼうつとしたようになつて、

「あら、おかあさん。」

と呼よびかけました。そしていつまでもいつまでも、顔かおを鏡かがみに押おしつけてのぞき込こんでいました。

その後<sup>のち</sup>おとうさんは人にすすめられて、二度<sup>ど</sup>めのおかあさんをもらいました。

おとうさんは娘<sup>むすめ</sup>に、

「こんどのおかあさんもいいおかあさんだから、亡<sup>な</sup>くなつたおかあさんと同じ<sup>おな</sup>ように、だいじにして、いうことを聴<sup>き</sup>くのだよ。」

といいました。

娘<sup>むすめ</sup>はおとなしくおとうさんのいうことを聴<sup>き</sup>いて、

「おかあさん、おかあさん。」

といつて慕<sup>した</sup>いますと、こんどのおかあさんも、先<sup>せん</sup>のおかあさんのように、娘<sup>むすめ</sup>をよくかわいがりました。おとうさんはそれを見<sup>み</sup>て、よろこんでいました。

それでも娘はやはり時々、先のおかあさんがこいしくなりま  
した。そういう時、いつもそつと一間に入つて、れいの鏡を出し  
てのぞきますと、鏡の中にはそのたんびにおかあさんが現れて、  
「おや、お前、おかあさんはこのとおりで達者ですよ。」  
というように、にっこり笑いかけました。

こんどのおかあさんは、時々娘が悲しそうな顔をしているの  
を見つけて心配しました。そしてそういう時、いつも一間に入  
り込んで、いつまでも出てこないのを知つて、よけい心配にな  
りました。そう思つて娘に聴いても、

「いいえ、何でもありません。」

と答えるだけでした。でもおかあさんは、何だか娘が自分にか



くしていることがあるように疑つて、だんだん娘がにくらしくなりました。それである時おとうさんにその話をしました。おとうさんもふしぎがつて、

「よしよし、こんどおれが見てやろう。」

といつて、ある日そつと娘の後から一間に入つて行きました。そして娘が一心に鏡の中に見入っているうしろから、出し抜けに、

「お前、何をしている。」

と声をかけました。娘はびっくりして、思わずふるえました。

そして真つ赤な顔をしながら、あわてて鏡をかくしました。おとうさんはふきげんな顔をして、

「何だ、かくしたものは。出してお見せ。」

といいました。娘は困ったような顔をして、こわごわ鏡を出しました。おとうさんはそれを見て、

「何だ。これはいつか死んだおかあさんにわたしの買ってやった鏡じゃないか。どうしてこんなものをながめているのだ。」

といいました。

すると娘は、こうしておかあさんにお目にかかっているのだといいました。そしておかあさんは死んでも、やはりこの鏡の中にいらしって、いつでも会いたい時には、これを見れば会えるといつて、この鏡をおかあさんが下さったのだと話しました。おとうさんはいよいよふしぎに思つて、

「どれ、お見<sup>み</sup>せ。」

といいながら、娘<sup>むすめ</sup>のうしろからのぞきますと、そこには若<sup>わか</sup>い時<sup>とき</sup>のおかあさんそつくりの娘<sup>むすめ</sup>の顔<sup>かお</sup>がうつりました。

「ああ、それはお前<sup>まえ</sup>の姿<sup>すがた</sup>だよ。お前<sup>まえ</sup>は小<sup>ちい</sup>さい時<sup>とき</sup>からおかあさんによく似<sup>に</sup>ていたから、おかあさんはちつとでもお前<sup>まえ</sup>の心<sup>こころ</sup>を慰<sup>なぐさ</sup>めるために、そうおつしやつたのだ。お前<sup>まえ</sup>は自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の姿<sup>すがた</sup>をおかあさんだと思<sup>おも</sup>つて、これまでながめてよろこんでいたのだよ。」

こうおとうさんはいいながら、しおらしい娘<sup>むすめ</sup>の心<sup>こころ</sup>がかわいそうになりました。

するとその時<sup>とき</sup>まで次<sup>つぎ</sup>の間<sup>ま</sup>で様<sup>よう</sup>子<sup>す</sup>を見<sup>み</sup>ていた、こんどのおかあさんが入<sup>はい</sup>つて来<sup>き</sup>て、娘<sup>むすめ</sup>の手<sup>て</sup>を固<sup>かた</sup>く握<sup>にぎ</sup>りしめながら、

「これですつかり分わかりました。何なんというやさしい心こころでしょう。それを疑うたぐったのはすまなかつた。」  
「いいながら、涙なみだをこぼしました。娘むすめはうつむきながら、小聲こごえで、

「おとうさんにも、おかあさんにも、よけいな御心配ごしんぱいをかけてすみませんでした。」  
「  
といました。」

# 青空文庫情報

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年4月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：佳代子

2004年2月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さんです。

# 松山鏡

楠山正雄

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>